

### ⑦ ヤゴ

滝不動で最も目立つ虫はトンボで、その幼虫がヤゴです。崖下の水路に溜まった落ち葉と泥を持ち上げてみると居ました。サナエトンボの仲間のヤゴのようです。見かけによらず肉食性で強力なアゴを伸ばして獲物をつかまえます。成虫は体長 40mm 内外、黒地に緑黄色の斑紋があり、しつぽの細いトンボです。晩春～初夏の早苗取りのころに発生するのでこう呼ばれています。一緒に写っているのはカワゲラとヌマエビです。

### ⑧ サワガニ (県NT2)

サワガニがいるということは水がきれいな証です。日中は石の陰に隠れていますが、雨の日には昼間でも活動するようです。なんでも食べます。捕まえて水槽に入れたら、目の前で一緒に入れたカワゲラを食べました。昔は湧水や台地や丘陵の細流であればどこにでもいましたが、今では残念なことに絶滅危惧種になっています。大事にしましょう。

### ⑨ 魚の群れ

多和目からの水路と二号堰からの水路がぶつかるあたりは、本流から入ってきた魚たちがいます。凄いスピードで泳ぎまくり、群れを成しています。カワムツが多いようです。水草の中を泳ぐさまはいつ見ても気持ちが良く見とれます。こちらの姿を見ると群れがサッと移動します。

### ⑩ 春先には稚魚たち

多和目からの水路と二号堰からの水を分岐して、高麗川へ直接放流しています。放流口には、水が綺麗なため、春先には稚魚たちが集まっています。波紋を作りながら泳ぐ姿はやはりみとれます。以前は、滝不動の水田をつなぐ水路にはたくさんの稚魚が見えましたが、残念ながら最近見かけるのはここぐらいです。最近の高麗川の護岸工事で支流に入り込むことができなくなっているのが原因かもしれません。

### ⑪ ミナミメダカ (国VU、県NT2)

春先、田植えの準備ができた頃から水田の水を切るまでの時期はメダカの季節です。城西大学のグラウンドの駐車場付近にある水田の用水路に注目です。銀色の目玉と黒い背中の中縦筋がある小さな魚、メダカを見つけました。数匹でスイスイと泳ぐのが特徴です。

### ⑫ 最後の田んぼ

滝不動の最後の田んぼです(2020年7月撮影)。有機栽培のようで、オタマジャクシが泳ぎ、小さなタニシが稲の根元に集まり、イトトンボが飛んでいるのも見つけました。この年を最後に滝不動の田んぼはなくなりました。高齢化と担い手不足が大きな問題です。

### コラム メダカの学校

メダカは、卵から孵化するには、水温 20 度以上が絶対条件で、孵化まで 9～11 日。川魚では 1～3 日程度が多いので、時間が掛かる魚です。この間安全な場所が必要です。このような条件を満たすのは、湿地や水田です。水田を耕して川から水を引くときに水田に移動して、他の魚が生まれてくる前の 4 月に、水温が上がりやすい条件を利用して産んで孵化します。この時期、オス同士が喧嘩をして波紋ができるので、そんな時には水田をのぞいてみましょう。

メダカは、水田・水路にいるので、昔はとても身近な魚でした。食べ物は微生物（プランクトン）、ミジンコ、ケイソウなどです。水質もあまり気にしません。観賞魚にもしやすいです。ホームセンターには、色々な色のメダカが売られています。

ところで、今大問題が起こっています。飼っていたメダカを川に放すことで、本来、その地域にしかない在来のメダカの DNA が守られず在来種絶滅の危機にあります。また、生息環境の喪失や外来種の侵入で今や貴重種になってしまいました。

買ったメダカはずっと家においてください。

高麗川でもメダカが捕れます。特に大水が出た後に多いように感じます。水田や水路から流されてきたのかと思います。

### ■ 参 考

この記事は、環境学館いずみでこれまで行ってきた観察会・講座の成果に基づいています。

時 期	観察会・講座の名称	講 師
平成 26 年 6 月 15 日	「滝不動湧水群周辺の自然を見つめる」フォーラム	鳩山野鳥の会 富田恵理子
平成 27 年 1 月 25 日	日本の川を知り、高麗川を知る	京華中学・高等学校教師 渡辺昌和
平成 28 年 8 月 21 日	メダカのがっこう～知られていないメダカの不思議	同上

(稲垣)

### 5.1.5 虫たち

#### ■ お勧めのポイント

まず注目したいのは、滝不動湧水群から流れる湧水を主体とし、崖に沿って流れる水路です。夏はオニヤンマがその雄姿を見せてくれます。また、水田を挟んで高麗川の河畔林が連続しており、虫たちにとっては恵まれた環境といえます。ただ、最近除草剤の散布などにより、年々棲みづらくなっている現状があります。



#### ■ 春の滝不動

春、滝不動で目立つのはスジグロシロチョウ、ツマキチョウなどのシロチョウ科の仲間です。また、崖に沿った水路では、アオハダトンボやカワトンボが観察できます。まれにミヤマカワトンボも見ることができます。そのほか、オジロサナエやホンサナエなど、サナエトンボの仲間も水路近くを飛んでいます。

#### ■ 夏の滝不動

オニヤンマは城山から環境学館いずみまで、高麗川では広範囲に分布していますが、滝不動周辺が一番観察しやすいのではないのでしょうか？生息する水路の脇が遊歩道になっているため近づくのも容易で、産卵や羽化のシーンに立ち会ったこともあります。

ハラビロトンボは城山や浅羽ビオトープでも見られますが、滝不動周辺がもっとも個体数が多く、特に水田とその周辺の休耕田が観察ポイントとなっています。

チョウではコムラサキやゴマダラチョウが見られ、運が良ければ高麗川河畔林側の草地で、ウラギンヒョウモンに会えるかもしれません。

#### ■ 秋の滝不動

秋になると、虫の数も種類もだいぶ減ってきます。その中で目立つのが赤とんぼの仲間です。滝不動周辺ではナツアカネ、アキアカネなどいろいろな赤とんぼ見られますが、特にミヤマアカネが多いようです。名前はミヤマですが、深い山でなければ見られないわけではなく、平地でも普通に見られます。

① ツマキチョウ (オス)



② アオハダトンボ (オス)



③ アサヒナカワトンボ橙色型 (オス)



④ アサヒナカワトンボ透明型 (メス)



⑤ ゴイシシジミ



⑥ オニヤンマ



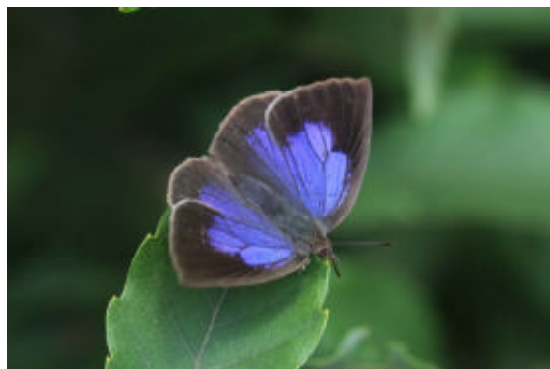
⑦ ハラビロトンボ (オス)



⑧ ミヤマアカネ (オス)



## ⑨ ムラサキシジミ (メス)



## ⑩ ウラナミシジミ (オス)



## ① ツマキチョウ

モンシロチョウやモンキチョウなどと同じシロチョウ科の仲間です。他の仲間は春から秋まで観察できるのですが、ツマキチョウは春しか姿を見せません。春に羽化した成虫は、すぐに卵を産み、孵化した幼虫は成長し蛹になりますが、そのまま夏・秋・冬と蛹のまま過ごし、翌年の春に成虫になるからです。

## ② アオハダトンボ (国NT、県VU)

高麗川では、夏になるとアオハダトンボによく似たハグロトンボがたくさん発生します。アオハダトンボはそれに先立ち、5月くらいに発生します。全身が金緑色に輝き、特にオスは翅まで輝きます。

## ③ ④アサヒナカワトンボ

写真は2枚ともアサヒナカワトンボです。アサヒナカワトンボは同じ種でも、個体によって翅の色が違うのが特徴です。

## ⑤ ゴイシシジミ (県NT2)

写真で見る通り、小型のかわいらしいシジミチョウですが、幼虫は肉食です。ほとんどのチョウは幼虫が植物の葉や花を食べますが、ゴイシシジミはササの葉につくアブラムシを食べます。ただし、いくらササがあってもアブラムシが発生していなければゴイシシジミもないわけで、毎年発生する場所が変わります。

## ⑥ オニヤンマ

日本最大のトンボです。滝不動の水路上を悠然と飛ぶのを見ることができます。複眼は金緑色に輝いていますが、羽化したばかりの個体は薄茶色をしています。

## ⑦ ハラビロトンボ (県NT2)

このトンボも滝不動だけでなく他の場所でも観察できますが、滝不動以外では個体数が少ないようで確実に観察するには滝不動が適しています。

## ⑧ ミヤマアカネ

秋の主役アカトンボの仲間です。滝不動ではマユタテアカネやアキアカネなど他にも観察できますが、一番存在感のあるのはミヤマアカネだと思います。

## ⑨ ムラサキシジミ

夏にも羽化しますが、秋の方が個体数は多いようです。成虫で冬を越します。

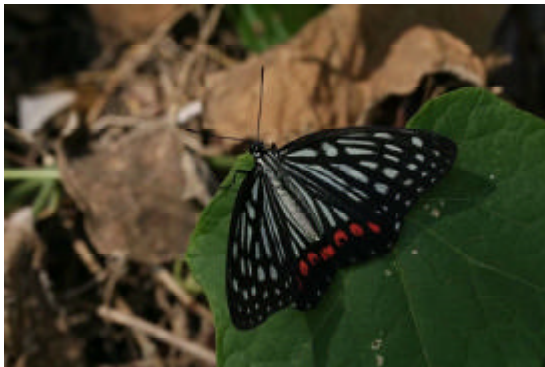
## ⑩ ウラナミシジミ

坂戸では春～夏は見ることはできません。秋になるといつの間にか現れます。これは南の地方で発生したものが、発生を繰り返しながら北上してくるからです。

そして、翌年また南から北上して分布を広げ、冬に死滅するということを毎年繰り返しているのです。滝不動周辺では、他の場所より観察する機会が多いようです。

## コラム 外来種の話

最近になって、昔はいなかったチョウがいつの間にか目につくようになり、違和感を覚える人もいます。実はこれらのチョウは、人為的に海外から国内に持ち運ばれたものです。坂戸周辺ではアカボシゴマダラとホソオチョウが定着しつつあります。



アカボシゴマダラ



ホソオチョウ（オス）

問題なのは、両種とも在来種と食草（食樹）が同じであることです。そのため競合により、在来種の生存が脅かされる恐れがあります。

## 分布を拡大しているチョウ

外来種ではありませんが、同じように昔はいなかったチョウがいつの間にか目につくようになり、違和感を覚える人もいます。これらのチョウは、以前は坂戸より南の温かい地方に分布していたものが、だんだん北へ分布を拡大してきたものです。坂戸周辺では、ツマグロヒョウモンとムラサキツバメが定着しつつあります。

もしかしたら地球温暖化の影響かもしれません。



ツマグロヒョウモン（メス）



ムラサキツバメ（メス）

(河合)

## 5.2 浅羽ビオトープ

<p><b>■ 行き方</b></p> <p>所在地：坂戸市大字浅羽</p> <p>電車：東武東上線「坂戸駅」から徒歩 20 分</p> <p>車：県道 74 号日高川島線の「浅羽ビオトープ」道路標識が目印です。</p> <p>駐車場あり。</p> <p>トイレ：駐車場に公衆トイレあり。</p>	<p><b>■ 案内図</b></p> 
--	--

### ■ 魅力

浅羽ビオトープは、農業用水路・雨水排水路である鶴舞川（伝川）が高麗川に流れ込む場所に位置し、河畔林が発達しているのが特徴です。水辺と林の連続は動物たちにとって暮らしやすい環境です。周囲に水田が広がり、鳥が餌を採るための好条件がそろっています。

平成 16 年には「関東の富士見 100 景」にも選ばれ、バードウォッチングのメッカとなり、遠くからもカメラマンがたくさん押し寄せるスポットになりました。

専用駐車場から高麗川の堤防に上がり、少し下流（関越自動車道側）に向かうと、河川敷に橋が見えます。橋を渡って観察園路に入ります。園内の素掘水路沿いは、最も鳥を観察しやすい場所です。鳥はもちろん、イタチにあえるかもしれません。河畔林の中や高麗川の川岸、堤防の上からの河畔林の梢や中里堰も見逃せない観察ポイントです。林でドングリ拾いも楽しいです。ウラゴマダラシジミは小さい蝶ですが、ここの代表的な貴重種です。カブトムシなどの虫とりも楽しめます



浅羽ビオトープの案内板

### コラム 浅羽ビオトープとは

国道交通省荒川河川上流事務所、坂戸市役所、坂戸市民による「高麗川ふるさとの川整備事業～市民参加による川づくり～」が進められ、「こまがわ市民会議」の成果として高麗川整備構想図が平成12年に作られました。森戸地区は「豊かな自然を保全・育成するゾーン」、浅羽地区は「自然とふれあい、学習するゾーン」、栗生田地区は「水と親しみ・水辺を利用するゾーン」と決められました。

浅羽ビオトープは、平成15年に完成し、その時に設立された「高麗川ふるさとの会」によって管理され、今のような散策しやすく、動植物にとっても集いやすい環境になりました。

最も大きな工事は、右岸堤防の近くを通過して今の水辺広場に湿地を作っていた水路を全体に本流側に変えて今の水路にしたことと、園路の整備でした。

高麗川ふるさとの会は、植物や野鳥の観察会も定期的に行っていますが、水路の上流から流れてくるゴミをネットで貯めて捕捉したり、園路及び水路斜面などの草刈り、河床の泥さらいや、ゴミ拾いなどの管理作業を行っています。もっとも懸案だった水路の水質も改善されました。草刈りも、動植物への配慮を行うために、ふるさとの会で行うようになったそうです。植物などの観察会を毎月催されているので、参加すると新しい発見が待っています。



整備前の河川敷の状況 (写真提供 坂口稔)



整備後の野鳥観察会

整備後の植物観察会

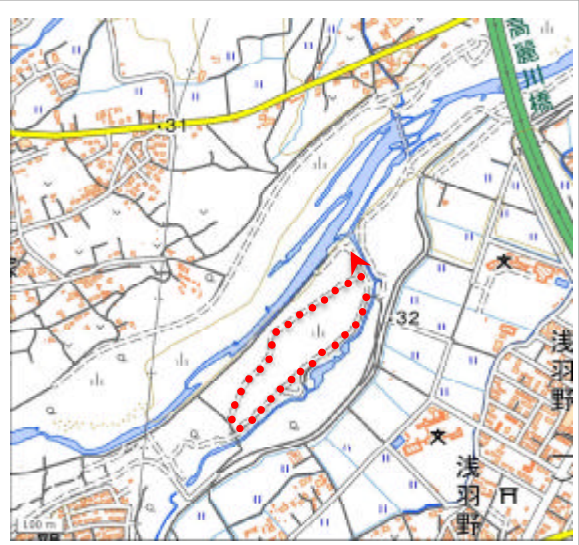
(稲垣)

## 5.2.1 植物

### ■お勧めのポイント

隣接する下流側には、江戸期に川越藩の御蔵米の生産地（川島町）を水害から守るために造られたと言われる「霞堤」の一部が残り、当時の土地環境が偲ばれます。土砂の堆積で生まれた陸地部は、明治期に開墾され桑畑として利用されました。「浅羽ビオトープ」は、この桑栽培放棄地が造成された所です。

老若男女=誰もが、河川域の生きものに触れ合える貴重な水辺空間となっています。



### ■景観と河畔の木々■

#### ①エノキ



#### ②オオシマザクラ・ヤマザクラ



#### ③クヌギ



- ①青空を黄色に染めて、開花するエノキ林。エノキは当地で最も株数の多い高木です。枝先が扇形に広がり、葉が茂ると丸い樹冠になります。
- ②風媒花の地味な花の多い当地に、華やかさを添える2種の桜。民有地の植栽。下層には、最も早く3月に開葉するイボタノキの緑色。
- ③育成されるクヌギ林の冬の光景。若い木ほど葉を落とさない光景は話題になります。

■ 浅羽ビオトープ “だから・こそ” の木々と草花 ■

① オニグルミ



② アケビ



③ ネムノキ



④ ヒメコウゾ



⑤ イヌザクラ



⑥ マユミ



⑦ イボタノキ



⑧ キササゲ



①オニグルミ クルミ科

株によって雌花と雄花の咲順が違う面白い性質がある。

②アケビ アケビ科

8個前後のめしべが全部実ってできた、タコ足果。

③ネムノキ マメ科

赤い刷毛はおしべ。開花は夕方。蛾を誘う秘策あり。

④ヒメコウゾ クワ科

赤ひげは雌花群の1個ずつのめしべ。左の団子状雄花群。

⑤イヌザクラ バラ科

ブラシの様に咲く桜。ウラミズザクラに対して“イヌ”。

⑥マユミ ニシキギ科

鳥を誘う森のシャンデリア。赤いのは種子ではなく仮種皮という組織。

⑦イボタノキ モクセイ科

ロウムシ分泌の蟻で“イボ取り木”が名の由来。ウラゴマダラシジミの食草。

⑧キササゲ ノウゼンカズラ科

“ささげ”状の細長い果実が垂れ下る。

コラム 残念な景観

◆「ビオトープ」というネーミングには、生物環境保全への企図がこめられています。しかし、当初遺存していた遊水地環境の希少種は消失し、畑の強害雑草や帰化植物が蔓延する現況です。雑草や帰化植物が悪いものではありません。人間による水域の改変・造成や舗装による土壌の変質と乾燥化に対する自然界の答えに他なりません。

◇民有地のエノキ・クヌギ・ムクノキなどの二次林の衰退と代わるイボタノキ・ヌルデ・ノイバラ・メダケ・ツルヨシなどの地表部被覆は、高木種の実生更新（みしょうこうしん）を妨げ、帰化植物の侵入・繁茂を助長しています。この「荒れた景観」は、人間の管理放棄の結果です。

◇一方、遊歩道が整備され、植樹と育成と草刈りで管理された造成水路側の整った景観に、人は和み、癒され、「美しい自然」を感じるのかも知れません。しかし、この美観は又、多くの湿性植物の消失・衰退を招いた管理の結果なのです。◆“荒れた”や“美しい”は、自然の本性ではなく、人間の価値観です。好対照をなす2つの景観も、人の価値観からだけでなく、そこに暮らす植物の形と意味を知っていくと思う、どちらも紛れもなく“生きもの空間-ビオトープ”だと。

⑨ スイカズラ



⑩ フユノハナワラビ



⑪ ニガカシュウ



⑫ ミクリ



⑬ カワラサイコ



⑭ サクラタデ



⑮ ミゾコウジュ



⑯ ガガイモ



⑪ コモチマンネングサ



⑫ カテンソウ



⑨ スイカズラ スイカズラ科

甘い蜜は子供も昆虫も大好き。

⑩ フユノハナワラビ ハナヤスリ科

羽状葉と孢子囊穂（ほうし・・・）で一枚の葉。太古からの化石的シダ。

⑪ ニガカシュウ ヤマノイモ科

雄株・雌株が遠距離にいるので種子は稀。当地のは珍しく雌株。

⑫ ミクリ ミクリ科（国NT、県NT）

茎の下方の雌花の実が“いが栗”。

⑬ カワラサイコ バラ科（県NT）

キジムシロの仲間。河原環境の激減で埼玉県の準絶滅危惧種。

⑭ サクラタデ タデ科

当地は同じタイプの花のみで種子はできない。（異型花柱性）

⑮ ミゾコウジュ シソ科（国NT、県NT）

準絶滅危惧種。サルビアの仲間でおしべがおもしろい。

⑯ ガガイモ ガガイモ科

めしべ・おしべが一体化した超不思議な花は、実も面白い。

⑰ コモチマンネングサ ベンケイソウ科

種子を作らず、むかごで増える。近年各地で激減している。

⑱ カテンソウ イラクサ科

好天でおしべは立ち上がり、反り返って霧のように花粉散布

### コラム 残念な景観の残念な植物

- ◆「ウラゴマダラシジミ」を育てているのは「残念な景観」の主犯イボタノキ林です。若葉は幼虫の食草、花は成虫の蜜源です。人にとっても、イボタロウカイガラムシの分泌する蠟は、かつて、いぼ取り・止血・塗料に役立つ生活資源でした。ヌルデにアブラムシが形成する虫こぶ「ヌルデミミフシ」は、今も貴重な古代からの伝統的染料「五倍子（ふし）」の原料です。薬剤ともなります。
- ◆“ビンボウカズラ”と呼ばれる畑の強害雑草「ヤブガラシ」は、家の衰亡の代名詞残念な草の代表格ですが、ドイツでは植栽され、フェンスを美しく飾るそうです。都内では、クスノキ科が育てるアオスジアゲハの蜜源として最近注目を集めています。花のデザイン・多量の蜜とそのコスト配分に加え、葉と対生する茎巻きひげが2回出ても1回休む態勢の謎は今だ論議の的です。種子を作る株と、不稔性（ふねんせい）の3倍体の2種類がありますが、都市では消えた種子株が、当地や市内にはまだ残っています。
- ◆「残念な植物」も、一木一草手にとり観察すると、そこらのただの植物の、只者ではない形や生き方が見えてきます。「不思議！・面白い！・凄いで植物！」なのです。葉で、花で、土の下で、他の生きもの達の命と繋がっている事が見えてきます。“ふれあい・楽しみ・学ぶゾーン”－浅羽“ビオトープ”を、いきもの目線から再考したいものです。名付けた組織も、管理する団体も、訪れる人々、私達も。

(福島)

## コラム 自然観察会参加者の声

環境学館いずみの市民環境講座の始まりは、2010年5月「さかど台地 水の恵み塾」でした。

準備期間中には、自然をテーマにした講座に人が集まるだろうかと心配する声も聞かれたようですが、ふたを開けてみると大盛況で、第一回の講座には39名という多くの方が参加されました。以来、2023年3月までの13年間で講座は110回開催され、延べ人数で2,297名の参加者がありました。

各回の講座で実施されたアンケートには様々な声が寄せられています。アンケートの中からごく一部ですが、参加者の声をご紹介します。

- ・坂戸に来て8年目、こんなにも自然があるとは思いませんでした。
  - ・初めて目にする場所ばかりで興味深く、今後も参加したいと思いました。
  - ・(真夏の河川敷で昆虫採集をして)暑い中その暑さも忘れ童子にかえり、楽しい時間でした。
  - ・蝶の仲間が多いこと、蝶の幼虫の食べ物に違いがあることにもびっくり。
  - ・何気ない花が愛おしく見えました。
  - ・見たこともない魚がたくさんいて、網の使い方とれ方が違うこと、種類もいろいろあることなど教えていただき興味深かった。
  - ・天気も晴れて気持ちがよく楽しかったです。樹木がたくさんあるのに驚きました。
  - ・ビオトープは来るたびに新しい発見があり思いもかけない事柄の知識を教わる。
  - ・野鳥のことが少しわかり、もっともっと知りたくなりました。
  - ・孫が来たとき資料を見せながら説明してあげようと思った。
  - ・湧水、清水が坂戸周辺にも沢山あるのに驚きました。
  - ・初めてコハクチョウを見ることができて良かったです。寒かったけど楽しかったです。
  - ・(城山に)植物から菌類まで貴重な植物がこんなにあるとは知らず、大変勉強になりました。ほかの方にも伝えたいです。
  - ・立ち止まって眺めていると、様々な鳥が飛び、身近な所で鳥を見ることができ、自然が守られているのは素晴らしいと思いました。
  - ・環境の大切さを考えさせられた。新しい見方をすべきことを思わされた。
  - ・いつも知らないことを一つでもわかって、教えてもらい楽しいです。
- まだまだ紹介しきれないたくさんの声がアンケートに寄せられました。



参加者の皆さんが講座で見つけた新しい発見や新しい知識、そしてなにより自然を楽しむ気持ちをたくさん書いていただきました。

是非ご一緒に坂戸の自然を楽しみましょう！！

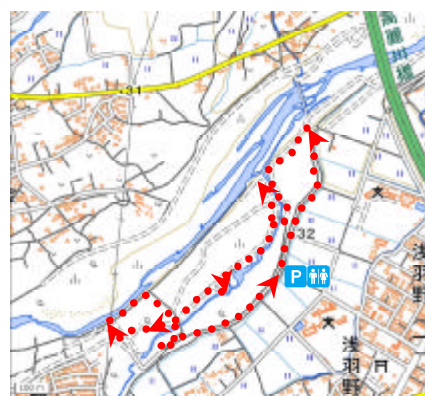
(松田)

## 5.2.2 鳥たち

### ■ お勧めのポイント

ビオトープの整備で鳥たちの格好の居場所になり、飛来する渡り鳥も多くなりました。

ここの渡り鳥は2対3で夏鳥より冬鳥の方が多いようです。また河畔林から背後に広がる田園緑地、適度な草が繁る水路がある環境は、里山の森林に住んでいる鳥たちが途中下車するのも都合よくなっており、100種以上の野鳥を観察できます。



① ヒレンジャク



② カワセミ



③ シメ



④ ベニマシコ



⑤ イカル



⑥ イカルチドリ



① ヒレンジャク（緋連雀） 冬春 L=17 cm

冬鳥として渡来し、北日本や本州中部の山地に生息していて3月～4月ごろ太平洋岸の各地に出現し、イボタ・ヤツデ・キツタ・ヤドリギなどの実を食べるようです。浅羽ビオトープでは、クヌギの新芽やヤブラン・リュウノヒゲの実を食べています。

時には100羽を超える群れを作ることもあります。

② カワセミ（翡翠）（県RT） 通年 L=17 cm

漢字で翡翠と書かれるカワセミは、コバルト色の背と腹側の橙色の組み合わせが美しいことから「飛ぶ宝石」とも呼ばれる美しい鳥です。

浅羽ビオトープでは繁殖期の4月～6月頃以外は年間を通じ見るすることができます。英名は kingfisher と呼ばれている名の通り、停空飛翔（ホバリング）して水中にダイビングし魚を捕らえる姿をよく見るすることができます。

③ シメ（鶺鴒） 冬春 L=18 cm

浅羽ビオトープには冬鳥として11月頃来て3月くらいまでおり、2～3月になるとあちこちに集まって群れをなした姿が多く見られます。木の間くらいの高さに見られることが多く、春に北へ渡っていく頃は下に降りてくることも多いようです。

くちばしが強く硬いものでもつつきますが、そういうごつい見かけの割にかわいい鳴き声で鳴きます。

④ ベニマシコ（紅猿子） 冬春 L=15 cm

顔が猿に似ているので漢字では紅猿子と書きます。冬鳥で浅羽ビオトープでは多い時で5～6羽見られ、色が鮮やかなので写真を撮りに多くの人が訪れます。水路側によく居ます。

メスはオスよりも多少地味な色ですが、優雅さがあります。

⑤ イカル（鶺鴒・または斑鳩） 秋冬春 L=23 cm

留鳥で100羽以上の群れをなして土手やビオトープ内を移動します。シメによく似ています。

5～7月は営巣のため、浅羽ビオトープには少なくなります。

⑥ イカルチドリ（桑鳩千鳥）（県NT1） 通年 L=20 cm

高麗川の砂礫の川原や中州に棲息しています。

ピオピオと鳴きながら飛び回っています。

6月～7月頃5cmにも満たない小さな雛が川原を駆け回り、親鳥が心配そうについて歩く姿は見飽きない光景です。

ただ高麗川にはこうした砂礫の川原が年々少なくなっているようです。

⑦ エナガ



⑧ カイツブリ



(全画 坂口稔 作・提供)

コラム 市の鳥について

浅羽ビオトープの美しい鳥たちの絵と説明を提供して下さった「高麗川ふるさとの会」の坂口稔さんは、以前ある方から市の鳥について意見を求められました。坂戸市では、市の木はサクラ、市の花はサツキと指定されていますが、市の鳥の指定はまだありません。高麗川を代表する鳥としてカワセミがあげられますが、カワセミは既に日高市などで指定されています。

坂口さんは高麗川の周辺に棲息する鳥の中から、

「留鳥であること」

(ヒレンジャク、キレンジャクは浅羽ビオトープを有名にした鳥たちですが、冬鳥や夏鳥のように特定の季節しかいないのは市の鳥には相応しくありません。)

「近隣の市町村で指定されていないこと」

(言うまでもなく坂戸市の鳥ですから、近隣との重複は避けたいですね。)

を条件に次の3種を推薦されています。

・イカルチドリ

高麗川の川原で営巣していますが、名前が少し長すぎるでしょうか？

・カイツブリ

背中に雛鳥を載せた姿は愛らしく、市のマスコットにふさわしいのでは？

・エナガ

姿、鳴き声が愛らしく、カイツブリ同様に市のマスコットにふさわしいのでは？

いつの間にか立ち消えになった市の鳥の話が再燃し野鳥に対する関心が高まれば、自然環境への関心につながると考えています。いずれ坂戸市民の意思で市の鳥を決めることができれば素晴らしいと思います。

⑦ エナガ（柄長） 通年 L=13 cm

背にワインレッドの羽を持った尾の長い小さくてかわいい鳥です。

木の二又になっている部分にコケなどで木肌そっくりの巣を作ります。

それでも天敵に襲われるのか途中で放棄した巣を見かけます。

浅羽ビオトープでは営巣して雛をかえしているようです。

7月～8月頃から、チーチー、チャッチャッ、ツリリリなどと鳴く子連れの10羽～20羽程の群れが見られます。

⑧ カイツブリ（鴛（にお） 鶺鴒（へきてい） 鶺鴒（へきてい）） 通年 L=26 cm

高麗川のいたるところに棲息しています。

足指にひれ状の弁膜がついており、水をかいてたくみに潜水します。20秒余りも潜ることができるようです。

6月～7月頃には背中に雛を乗せた親鳥をよく見かけます。

カイツブリは古くは鴛（にお）と呼ばれ万葉集では枕詞として登場しています。

俳句では夏の季語として「浮巢」あるいは「鴛の浮巢」として不安定な物や状況の象徴として多く詠まれています。

また琵琶湖には古くから多く棲息していて「鴛の海（鴛の湖）」と呼ばれていたようです。現在もカイツブリは滋賀県の鳥として親しまれています。

コラム 野鳥観察のマナー

浅羽ビオトープには遊歩道と共に観察のための通路が整備されています。むやみに河畔林の中へ踏み込むことは、鳥たちの棲み処を荒らすこととなります。

巣に近づくと鳥は営巣を放棄しますし、例えばヒレンジャクはヤブランの実を食べますが気付かずにヤブランを踏み荒らすとヒレンジャクは来なくなります。中には写真撮影のために雑木林を伐採したり、餌付けをしたりする人が時々見受けられ、生育環境の急激な変化が懸念されます。そういうカメラマンは野鳥が好きというよりも写真を撮るのが好きで、野鳥のことを考えていないのでしょう。野鳥の写真を撮るならば、まず野鳥を好きになって、野鳥に害を与えないように撮影を行って欲しいものです。

浅羽ビオトープの環境が野鳥にとって格好な場所になっているのでその数も増え、県内はもちろん、千葉、東京、神奈川などからたくさんの方が訪れるようになりました。高麗川ふるさとの方々をはじめ多くの方がこの環境を守ろうとしています。

浅羽ビオトープに限らず、年々棲み処が減少している野鳥たちが安心して生活できる場所を私達も守っていききたいものです。

**コラム 鳥から知る環境のものさし**

(財)日本鳥類保護連盟（現在は公益財団法人）による環境のものさしの定義があります。

単純に言うと珍しい野鳥がたくさん居るほど良い環境とみなし高得点、身近に居る鳥ほど点数が低くなります。

ものさしを使って浅羽ビオトープの環境を評価してみました。

観察できた鳥の合計点は

2004年4月～7月 82点

2011年4月～7月 106点

環境レベルは得点によりA～Eの5段階に区分され、上記点数はBで、丘陵、谷津、里山に該当します。浅羽ビオトープはそんな地域ではありませんが、ワンド、河畔林があり、住宅地から離れているため、同じような環境を作っていると思われます。

詳しくは「鳥から知る環境ものさし」をインターネットで検索してください。

高麗川ふるさとの会 第四分科会「野鳥」は毎月1回、浅羽ビオトープで野鳥の観察会を行っています。

2003年7月～2018年12月まで計186回の際に観察された種類と頻度は別表通りです。

渡り鳥、留鳥、浅羽ビオトープに営巣していなくても途中下車する留鳥など、合わせるといかに多くの野鳥が観察できたかがわかります。また観察会以外の日にこの表以外の鳥も見られたそうです。

坂戸市は関東平野の端に位置し、山があり（市内唯一の城山）、豊かな河畔林を持った川があり（高麗川、越辺川）、もちろん広い台地があり（坂戸台地）、首都圏でありながらも豊かな自然に恵まれていることをあらためて実感します。そのことを広く知ってもらい、守っていくことが坂戸市の発展につながれば素晴らしいことではないでしょうか。

野鳥名	頻度	野鳥名	頻度	野鳥名	頻度
ハシボソガラス	185	マガモ	33	キレンジャク	3
キジバト	185	コサギ	33	マヒワ	3
スズメ	185	ノスリ	33	ミヤマホオジロ	3
ヒヨドリ	183	オオヨシキリ	33	オシドリ	2
ハシブトガラス	182	イカル	33	オカヨシガモ	2
カルガモ	181	クイナ	32	ヒメアマツバメ	2
シジュウカラ	178	チョウゲンボウ	32	ツミ	2
ホオジロ	169	シロハラ	32	サシバ	2
カワウ	164	トビ	30	オオルリ	2
コゲラ	161	キセキレイ	30	ウソ	2

ムクドリ	157	タヒバリ	25	トモエガモ	1
ウグイス	154	アカゲラ	24	キンクロハジロ	1
コジュケイ	152	オオバン	21	スズガモ	1
アオサギ	149	アカハラ	20	チュウサギ	1
カワラヒワ	148	コチドリ	17	ヒクイナ	1
ダイサギ	143	クサシギ	17	カッコウ	1
モズ	140	タシギ	15	ムナグロ	1
ハクセキレイ	131	アオゲラ	14	キアシシギ	1
セグロセキレイ	121	ササゴイ	13	ツルシギ	1
カワセミ	119	カケス	13	ミサゴ	1
カイツブリ	104	アトリ	13	フクロウ	1
メジロ	101	ゴイサギ	12	アリスイ	1
キジ	98	ホトトギス	12	ヒガラ	1
ツバメ	96	イソシギ	12	コシアカツバメ	1
シメ	92	セッカ	12	エゾムシクイ	1
ツグミ	90	ハヤブサ	10	コサメビタキ	1
アオジ	89	オナガガモ	9	ビンズイ	1
エナガ	83	オオジュリン	9		
コガモ	80	ヒドリガモ	8	亜種	
カシラダカ	76	ノビタキ	7	ハチジョウツグミ	1
ヒバリ	73	ツツドリ	6		
バン	71	ヒレンジャク	6	外来種	
イカルチドリ	69	ハシビロガモ	5	ガビチョウ	164
ジョウビタキ	69	エゾビタキ	5	カオグロガビチョウ	47
オナガ	67	キビタキ	5		
オオタカ	57	アマツバメ	4		
ベニマシコ	49	ハイタカ	4		
イワツバメ	44	センダイムシクイ	4		

観察種数（観察で見つかった種の数・参考値）

第19回	2005年1月12日	44種	第87回	2010年9月8日	17種
第73回	2009年7月8日	16種	第139回	2015年1月14日	45種
第81回	2010年3月10日	47種	第182回	2018年8月8日	15種
延べ参加人数 2970人 1回/月					



■参 考

この記事は、環境学館いずみでこれまで行ってきた観察会・講座の成果に基づいています。

時期	観察会・講座の名称	講師
平成 27 年 3 月 15 日	高麗川の未来を考える 「高麗川の野鳥」	高麗川ふるさとの会 坂口 稔
平成 28 年 3 月 13 日	同上	同上
令和 元年 9 月 13 日	高麗川ふるさとの会 坂口稔氏へのインタビュー	同上

(小西)

観察の一コマ (色違い)



モンキチョウとモンシロチョウではなく、2匹ともモンキチョウです。モンキチョウのメスは黄色と白色がいます。モンシロチョウとの区別が難しいですが、モンシロチョウは黒の部分に白の斑が入ることはありません。



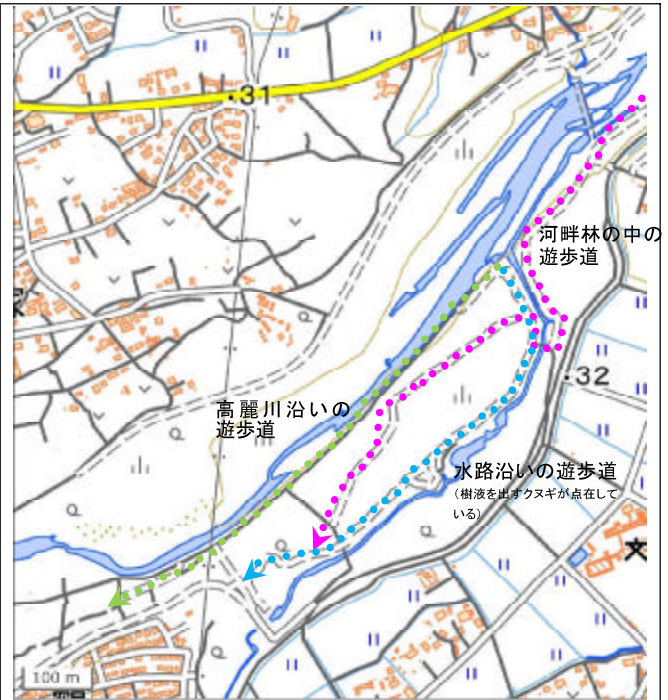
セグロセキレイは在来種で主に川にいます。ハクセキレイは北から進出してきた種で街中でも見かけます。2種は似ていますが、さえずり方も違い、意思疎通ができないそうです。もちろん仲は良くありません。

### 5.2.3 虫たち

#### ■ お勧めのポイント

野鳥の観察地として有名ですが、昆虫の観察にも適しています。メインの水路沿いの遊歩道の他に、高麗川沿いや河畔林の中にも遊歩道があり、四季を通じていろいろな虫が観察できます。

特に絶滅危惧種のウラゴマダラシジミは、食樹のイボタノキが林内いたるところにあるため個体数も多く、他の観察地に比べて容易に観察できます。



#### ■ 春の虫たち

毎年5月の連休前後にウスバシロチョウが姿を現します。成虫はこの時期しか出現しないのでお見逃しなく。

また、数は少ないですが、ヤマトシジミやツバメシジミに混じってトラフシジミがヒメジョオンの花を訪れます。

#### ■ 夏の虫たち

初夏の一時期浅羽ビオトープを歩けば、ウラゴマダラシジミを観察できます。ポイントは食樹であるイボタノキの花です。成虫はよくこの花に集まります。

夏になると高麗川沿いの道には、クズの花がたくさん咲きます。この花を丹念に探してみると、見事な保護色により花と同化した、ウラギンシジミの幼虫を見つけることができます。

また、この時期はコヤマトンボが縄張りを作っていて、高麗川本流を行ったり来たりしています。

そして高麗川の堤防を歩けば、桜堤公園同様キリギリスの声があちこちから聞こえてきます。

#### ■ 秋の虫たち

秋の虫の代表は浅羽ビオトープでも赤トンボの仲間です。やはりアキアカネがほとんどですが、他にマユタテアカネやミヤマアカネ、ノシメトンボなども観察できます。

チョウで目立つのはウラギンシジミです。夏にも羽化しますが、秋の方が個体数は多くなるようです。

① ウスバシロチョウ



② トラフシジミ



③ ウラゴマダラシジミ



④ ゴマダラチョウ



⑤ コヤマトンボ



⑥ ヒメサナエ



⑦ ウラギンシジミ (メス)



⑧ ウラギンシジミ幼虫



⑨ アカタテハ



⑩ マユタテアカネ (オス)



①ウスバシロチョウ

シロチョウの名前がついていますが、アゲハチョウの仲間です。食草はムラサキケマンですが、ウスバシロチョウの羽化する5月初めには既に成長を終えて地上に姿はありません。そのため、地面に落ちている枝などに産卵します。

②トラフシジミ

春と夏に羽化します。模様は一緒ですが翅の地色が違います。浅羽ビオトープではヒメジョオンの花によく集まります。

③ウラゴマダラシジミ (県VU)

ちょうど食草のイボタノキの花が咲く5月下旬～6月初旬に現れます。止まるときはほとんど翅を閉じていて、なかなか開いてくれません。

④ゴマダラチョウ

外来種のアカボシゴマダラと食樹が同じエノキなので、競合が心配されます。

⑤コヤマトンボ

写真の複眼は茶色ですがこれは未成熟の個体で、成熟するとオニヤンマのようにエメラルドグリーンに輝きます。

⑥ヒメサナエ (県NT1)

浅羽ビオトープでは、高麗川に近い河畔林の中の遊歩道で観察することが多いです。

⑦⑧ウラギンシジミ

幼虫は葉よりもクズなどのマメ科の花を好んで食べます。オスとメスで翅の色が違います。オスは橙色、メスは水色です。

⑨アカタテハ

よく似た仲間にヒメアカタテハがいます。ヒメアカタテハより個体数は少ないようです。

⑩マユタテアカネ

赤トンボの仲間です。秋のトンボですが羽化は意外と早く、7月初めには観察できます。

### コラム 森の妖精ゼフィルス

ゼフィルスとは、木の上を生活の場としているシジミチョウの一群で、ギリシャ神話の中の西風の神ゼピュロスが語源です。埼玉県のチョウ「ミドリシジミ」のように、オスが金緑色に輝く美麗種が多く、森の妖精とも言われています。坂戸市内では下の4種が観察できます。普段は木の高いところにいるのでなかなか目につきませんが、朝早い時間に行くと、下草などの低いところに降りてきていることがあります。



アカシジミ



ウラナミアカシジミ



ミズイロオナガシジミ



オオミドリシジミ

### 南からの使者あらわる

毎年夏になると、市内各地に突然トンボの群れが現れます。このトンボはウスバキトンボといって、南の暖かい地方で羽化した個体が、発生を繰り返しながら北へ分布を広げていきます。坂戸あたりでは早い年には6月中旬に姿を見せます。さて、どんどん北へ分布を広げていくウスバキトンボですが、多くの地方では冬の寒さに耐えきれず、冬を越すことができません。それでも毎年毎年同じことを繰り返しているのです。



ウスバキトンボ

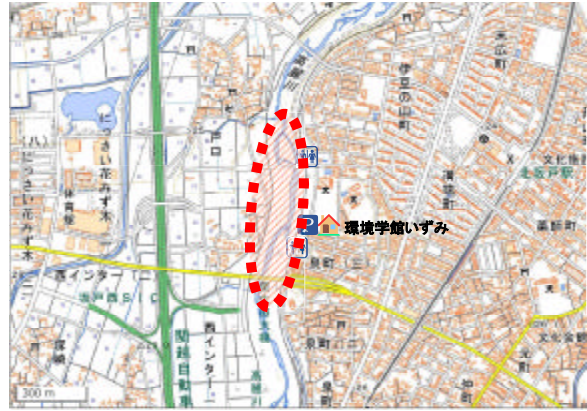
(河合)

### 5.3 泉町桜堤公園付近

#### ■ 行き方

所在地：坂戸市泉町～伊豆の山町  
 電車：東武東上線北坂戸駅・徒歩 15 分  
 バス：さっかちバス 桜小学校入口（さかど線）  
 車：坂戸スマート IC から 3 分  
 駐車場あり。（環境学館いずみ裏）  
 トイレ：公衆トイレあり。

#### ■ 案内図



#### ■ 魅力

高麗川は、秩父の沢水と台地の湧水に恵まれ、昭和 40 年代（1960 年代）までは子供たちが泳いだり、魚取りをする姿がたくさん見られたそうです。今は、水量が減ってしまい、泳ぐ場所はありませんが、実はまだたくさんの魚たちに出会えます。土手や河畔林には蝶やトンボが居ます。大きな魅力は湧水に恵まれた高麗川を気軽に体感できることです。つまり、水がきれいです。

泉町桜堤公園周辺の高麗川は、川に入りやすく、子供でも魚とりや虫とりをしやすい場所で、交通の便も良いので気軽に楽しめるのが魅力です。



戸口橋から上流を望む(春)

### 5.3.1 水の中の生きもの

#### ■ お勧めのポイント

湧水があり、夏に冷たい高麗川の澄んだ水は気持ちがいいです。童心にかえて魚と遊べます。

岸辺の水際ではアブラハヤ、ムサシノジュズカケハゼ、カワリヌマエビ、川の流心の石ころ河床ではカジカに出会えるかもしれません。

タモ（玉網）をもって、出かけましょう。



#### ① 湧水の川（川霧）

写真提供 池辺悠子



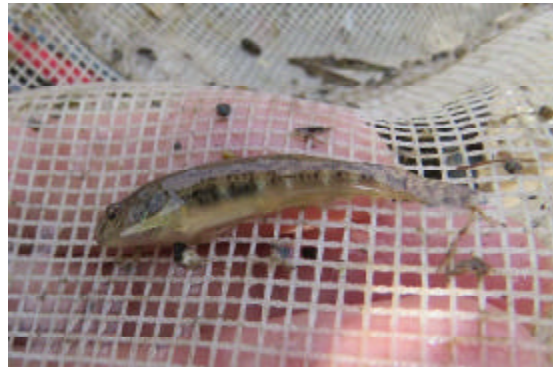
#### ② 魚とり



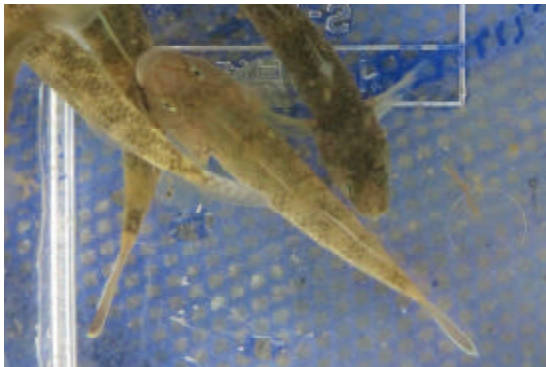
#### ③ アブラハヤ



#### ④ ムサシノジュズカケハゼ



#### ⑤ オウミヨシノボリ



#### ⑥ カジカ（大卵型）



### ① 湧水の川

湧水を岸边から確認できるのは、晩秋と早春の夜明けです。川の水面から湯気の漂う川霧は、暖かい湧水が、冷たい外気に当たり発生するものです。11月となると、高麗川の水温は5度を下回る場所もあり、湧水は16度程度と圧倒的な温度差です。一方、夏でも、湧水のおかげで水温が大きく上昇することはありません。岸边付近の砂地を見ると実際に湧いている湧口も見つけられます。魚たちにとって、水温はとても大事なようです。湧水がないと棲めない魚が多いのが、高麗川の特徴です。

### ② 魚とり

私たちが年に1回、7月に魚取りをします。漁業権が設定されている高麗川でも子供がタモ（玉網）を使ってとるのは問題ありません。岸边の草むらにタモを立て、足で踏みながら誘い込みます。川の中では、大きめの石の下流側にタモを立て、同様に誘い込みます。お子さんと一緒に時間の経つのを忘れましょう。

ここでは、タモで取れる魚を主に紹介します。

### ③ アブラハヤ

ぬるっとした体からアブラハヤと呼ばれています。触ってみてください。体長3～8cm程度です。ツルヨシなどの中に群れているので、タモに入りやすいです。黒い帯があるものとこれが明確でないものがありますが、胸ひれの根元がオレンジ色なのが特徴です。水温が高くなるのは苦手で、綺麗な清流にしか棲めません。

### ④ ムサシノジュズカケハゼ（国EN）

坂戸市の魚を決めるとしたらこの魚です。湧水がないと産卵できない魚です。お腹に数珠が並んでいるように見えるのでこの名前がつけました。体長は3～5cm程度です。5月に産卵をしますが、この時期にオスではなく、メスが派手な婚姻色を出す点が変わっています。普段は浅瀬の砂に潜って生活します。この魚がいなくなったら湧水がなくなったことを意味し、それは高麗川が高麗川でなくなったことを意味します。観察を続けるためにも魚取りをしましょう。

### ⑤ オウミヨシノボリ（※以前のトウヨシノボリ）（国内外来種）

ジュズカケハゼと同じぐらいの大きさですが、ヨシノボリは目の前に赤いバンドがあります。在来種のクロダハゼも居たかと思われませんが、今ではアユなどの放流で紛れ込み居ついたものが主と考えられています。多くのヨシノボリとは違い、子供は海に下りません。水田の引水でドジョウやメダカと一緒に水田で成長する姿も見られるようです。腹びれが吸盤状に変化しており、葦に登ったり、堰も上がることができます。

### ⑥ カジカ（大卵型）（国NT）

カジカは、有名な魚ですね。本来、もっと山奥の清流にいる魚です。なぜ、高麗川にいるか。一つには、坂戸が秩父の溪流に近いこともありますが、山奥の川と同じような環境を持っているからです。地元の60才台後半以降の方はカジカの卵取りをした経験があるようです。カジカは、ムサシノジュズカケハゼに比べるとずっと大きく、取れた時には思わずニヤリとなります。川を中心の流れの早いところの石の下を狙いましょう。

※）トウヨシノボリは、元はクロダハゼとも呼ばれ、最近の研究でいくつかに分けられました。当地のものはオウミヨシノボリのようなようです。

⑦ ヒガシシマドジョウ



⑧ スナゴカマツカ



⑨ ニゴイ



⑩ ギンブナ



⑪ タモロコ



⑫ カワリヌマエビ

写真提供 渡辺昌和



### コラム 魚の目から見た高麗川

高麗川は急激な増水がある川で、本来、河床が安定せず、出水のたびに石がこすれ合い、川底の石には藻が少なく、泥も少ない砂利川です。周辺が台地となっているので、河床からの湧水が多いです。こんな環境が好きで棲んでいる魚が多いです。

ところが最近、水量が減って、大水も少ないので、砂利の河原から草の河原になり、泥が貯まった川底では藻が多くなり、水温が上がってきました。温暖化がいち早く来ています。また、子育てや大水の時に逃げ込む支流もコンクリートで固められ困っています。